

国際協力について考える

氏名: 北山 理加

学校名: 大阪市立玉津中学校

担当教科: 社会科

実践教科: 道徳・社会科

時間数: 2時間

対象学年: 中学1年生

人数: 105 人(35 人3クラス)

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

- ①多文化社会を知り、自分の身の回りで起こっている出来事だということを実感・理解する。
- ②日本が多民族国家であるということを理解し、国際協力の視点を形成する。

【2】 単元の評価 規準例	(ア) 知識・技能	知らない言語への対応など、自分自身の行動を振り返り、実際の場面でどう対応するのかまで具体的に実践する力を身に着ける。
	(イ) 思考・判断・表現	国際理解、国際貢献に努めることの大切さについて、先進国の役割、ひいては自己の役割を意識し、表現することができる。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	多面的な視点を持ち、友達の感じ方などを理解しながら、多文化社会に対する視野を広げることができる。 国際的な協力体制の必要性を理解し、グローバル社会へ貢献する視点を持つことができる。
【3】 単元設定の理由 ✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容	【単元設定の理由】 いまでも日本は「日本は単一民族国家」として一つの国、一つの民族、一つの言葉、一つの天皇という王朝が続いている国だと思う人は少なくない。しかし、日本の歴史において、アイヌ民族や琉球王国、在日韓国・朝鮮人など様々な人々によって日本が形成されていることは明らかであり、これを「単一民族」としてまとめてしまうのは、実体とのあまりにも大きく乖離していると言わざるを得ない。また、近年では新たに渡日した人々（ニューカマー）であったり、技能実習生の受け入れも政府によって拡大している中で、「多様性JAPAN」の視点を持って成長して欲しいという考えから、①多文化を体験し受け入れる、②国際協力について考える、という構成で生徒の意識に働きかけたい。 【生徒観】 本校の生徒は4小学校からなっており、どの小学校も単学級で人間関係が変わらない中で6年間を過ごし、中学校に入り異文化交流のような状態から学校生活がスタートした。中学校に入り、互いに小学校の時の話などを持ち寄り、新しい人間関係を作っていく様子は、4小学校から集まる本校ならではの姿である。また、校区が森ノ宮～玉造～鶴橋にわたっており、コリアタウンも近場にあることなどから、在日韓国・朝鮮人やルーツのある生徒も多数存在しており、本名で通学している生徒も多いが、その他の国にルーツがある生徒の存在が意識されることは少なく、多文化共生の感覚は薄いように感じる。この単元を通じて、他国の文化や国際理解について、多面的・多角的に考え、今後の教育活動での学習に生かしていきたい。 【教材観】 テレビなどで見たことのある人物を題材にしている教材であるため、生徒たちは興味を持ちやすい。また、「海賊」というキーワードもとっかかりやすい題材である。現実問題として海賊行為は犯罪であり、また「犯罪をしなければならない理由」ということに対し、そこに戦争による貧困があることまでを考え、現実を知る文章である。国や地域を越えた国際貢献を果たしていくことに対し、日本ひいては自分たちの役割を考えていきたい。	

【指導観】 指導にあたっては、海賊の問題は暴力では解決しないほどの背景があることを文章から読み取らせたい。そのため、登場人物（木村社長）の考えを読みとって、自分の考えを振り返らせる。また、資料の読み取りや歴史的背景を知ること、昔の話ではなく、現代の問題として課題に取り組む姿勢を養わせる。また、ワークシートを使用することで自分の心情の変化に気付かせ、目的に応じた発問を工夫することで、生徒の自主的な発言をうながし、思考力・表現力を高める指導を行いたい。 【設定時に想定された生徒の変容】 多文化理解ゲームに関しては、知らない言語、知らない文化に対する興味や不安、拒絶がおこり、「どうせ自分には関係ない」という反応が想定される。しかし、2限目の海賊の背景や国境を超えた日本人の支援により、自分の考えの浅さに気付き、少しでも国際貢献への理解を深めることができると思う。ワークシートの最初の「海賊をなくすためにどうしたらよいか」という発問に対する答えが授業の中で変化することを期待している。			
【4】 展開計画（全2時間）			
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	言葉や文字がわからない状態を体験することで、不安な気持ちやいらだちを理解するとともに、逆に自分たちの学校に言語の違う友達が来たらどうすることが必要なのか、主体的な考えと行動力を身に付けさせるきっかけとする。	「何が起った？（震災編）」の活動 アクティビティに従って、自分たちで選択し、自分たちの身近な課題への気付き、今後このような状況になった場合への対応などを理解し、多文化共生社会への目を向けさせる。	「言葉がわからない」体験ゲーム 「何が起った？（震災編）」 国際教育研究会 Golcal net Shiga 制作
2 本時	これからの日本を担う中学生に自国のことのみにとらわれず国際的な視野に立ち、世界の平和と人類の幸福に貢献しようとする心情を高め、実践的な態度を培っていく。	「すしざんまい社長が語る「ソマリア海賊問題」」を題材に、海賊に至るまでの背景、それを支援し海賊という行為ではなく漁師として働き海賊減少のための民間外交や先進国の役割などを知り、途上国支援の必要性を認識させる。	ハーバービジネス オンライン すしざんまい社長が語る「築地市場移転問題」と「ソマリア海賊問題」 より抜粋 hbol.jp/pc/77365/

【5】 本時の展開			
過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	・ 国際社会の現実を知る 「海賊のイメージは？」 「現代に海賊はいると思う？」 ・ ソマリア海賊の話を知る	・ テンポよくスライドを出すことで興味をひく ・ 海賊はカッコいいものではなく、人殺しや略奪を行う犯罪行為であることを忘れない	・ パワーポイントにて写真の提示 (ワンピース、パイレーツオブカリビアンなど、カッコいい海賊のイメージ) ・ ワークシート
展開 (35分)	・ ソマリアの漁民が海賊になった経緯を知る 「そもそもソマリアってどこ？」 「ソマリア海賊は身代金の要求を目的に襲撃をしています。では実際にどんな事件があったか見てみよう。」 ・ 各国の対応を知る 「海賊を撲滅するためにはどうしたらいいと思う？」	・ ソマリア海賊の実態を知り、なぜそうなっているのかを自分で考えさせる ・ 軍事行動が世界的基準ではあるが、それで解決できるものではないことを注意する	・ パワーポイントにて写真の提示 (実際の海賊の写真) ・ パワーポイントにて写真の提示 (各国の海賊への対応)
海賊を取り締まるのが解決になるだろうか。本当に必要な支援とは？			
	・ 「この問題を解決した一人の日本人がいます。この人を知っていますか？」→写真を提示 ・ インタビューを配って範読 ・ 本当に人が必要としているものを考えることの大切さを知る 「ソマリア内戦の結果、海賊行為をしないと生きていけない人たちに木村社長はまず何をしましたか？」 「海賊たちにどのような人生を送ってほしいと訴えていましたか？」	・ 海賊にならざるを得なかった背景にせまる ・ 木村社長の、口だけでない実践力に触れ、そういった事例を知ること生徒自身への気持ちの揺さぶりをかける。 ・ たとえ国や背景が違って「人」である以上対話が必要、暴力では解決しないことを理解させる	・ ハーバービジネスオンラインからの抜粋「すしざんまい社長が語るソマリア海賊問題」 ・ パワーポイントで内戦の写真や、先進国が核廃棄物をソマリア沖に棄てている現状を伝える。

終末 (10分)	・文章化 「木村社長は、商売にとって目の前の利益よりも必要なことは何だと言っていますか。」 「いまでも内戦が続いている国があります。さらに戦争で仕事や住む場所、さらには命の危機にさらされている人たちに何ができるか、を考えられる人になって欲しいと思います。」	・自分の言葉で思ったことをまとめさせる。 ・日本で当たり前のことが、海外では当たり前ではないこと、将来社会の中で、自分だけが良ければそれでいいといった考え方にならないように持っていきたい。	・ワークシート
【授業実践の様子】			
1、2：ソマリアの漁師たちが海賊にならざるをえなかったことを説明しているところ (バーレ政権崩壊後、軍事政権が樹立、軍と先進国の企業が手を結び、武器を売るかわりに核廃棄物をアデン湾に棄てる条約を結んだ、というスライド) 3：ソマリアの治安悪化にともない、海賊が増えたことを説明しているところ			
【6】 本時の振り返り			
今後の社会科の授業で「アフリカ州」「北アメリカ州」など州ごとの単元の授業をしていく中で、「経済格差」や「貧困」、「難民」といったキーワードを外すことはできない。その時にいかに自分事として考える姿勢を持つことができるのか、様々な問題解決のために国が、地域が、ひいては世界全体がどのような対策をしていく必要があるのかなどを問いかけ、国際理解・国際協力への視点を養うことを続けていきたい。			
【7】 単元を通した児童生徒の反応/変化			
本時のワークシートより「相手の理由を聞かないまま、勝手に決めるけることがダメだと分かった」「他国のことを他人事のように思わず行動にうつして人を救っている人がいて、すごいと思った。」「悪いことをしているように見えても、決めつけるのではなく、きっと向こうにも何か事情があるのだという考え方をして、世界中で発生していることに対して考えたい。」という意見が見られた。 本時の最初の質問「海賊を撲滅するためにはどうしたらよいか。」という少々過激な質問に対し、「人工衛星を使ってアジトをつきとめる」や、「海を見回りして捕まえる」という考え方をしていた生徒たちが、「相手の意見も聞かずに決めつけるのはよくない」という考え方に変容したことが大きな変化である。			
【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】			
社会科の授業ではアジア州やヨーロッパ州などの学習を進める中で、どうしても「発展途上国」や「スラム」の学習時に、侮蔑的な発言をする生徒がいた。その場その場で指導はするものの、根本的になぜ「発展途上国」や「スラム」を見下してはいけないのかわからないようであった。今回の単元を通じて、「相手の事情を知って、途上国に何が必要なのか、自分たちにできることは何か」を再度授業の中で聞いてみたところ、「学校を作る。」と前者の生徒が答えたことは興味深いことである。また、周囲の生徒も同じく、金銭的な援助だけでなく、衛生面の知識や技術提供、一緒に働く、などの発言が見られたことは、今後も学習を続けていく上で必要な視点であると思う。			

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】

(授業前)

学習前の生徒たちは、同じクラスに韓国・朝鮮にルーツがある生徒、中国にルーツがある生徒がいることはわかっているが、実際に日本語が通じない生徒や、自分たちが言葉がわからない状況になるということ考えたことはなかったようである。また、前述したように、他国のことを学んでも、遠い国のことで日本に住んでいる自分たちには関係ないという意識を持つ生徒が多く、自分事として考えることが難しかった。

(授業後)

明日にでも日本語がわからない生徒がこのクラスに来る可能性がある時代であること、その時に自分たちにできること、いまの玉津中学校では何が足りないのかを真剣に考えることができ、授業後に実際に本校の最寄り駅で多言語表示のプレートを確認した、などという生徒も見られた。また、言葉が違うからといって、決めつけたり話し合うことを放棄してはいけないという考えを持ったことが理解できたのか、その後の社会科の授業で「難民問題」が取り上げられたときに、「どうしてそうってしまったのか」「どこの国がどんな支援をしているのか」にとっても興味・関心を示していた。

【8】自己評価

1. 苦労した点	当初からある程度予想が出来たことではあるが、やはり「言葉がわからなければ、翻訳アプリを使えばええやん。」「日本に来るんやったら日本語勉強してきたらええやん。」といった反応で、最初は全く取り合おうとしない態度の生徒たちがいたため、その意識から変えていく必要があった。どうしてこのような授業を行うのか、もっと前からそういった意識づけをするような話をしておくべきだったと思う。
2. 改善点	今回の内容は一例であって、すべてのアフリカの海がそうではないし、すべての先進国が海賊に対して攻撃的な態度をとっているわけではない、というあくまで「一例である。」ことをもっと強調すべきであった。また、こういった国際理解協力の授業をすることの意義を、「言葉や文化の違う人と一緒に学校に通ったり、将来一緒に仕事をするかもしれない」「自分が違う文化の国に行くことだってあるかもしれない」と冒頭に生徒たちに話をしたが、例えば他の地域や国の中学生でもこうした国際理解の授業を行う、君たちには国際基準の感覚を持ってほしいといった「グローバルスタンダード」という意識をもう少し話をしてもよかったと思う。
3. 成果が出た点	途上国や各国の経済格差について、遠い国のことではない、無関係なことではないんだ、話し合うことで解決の糸口が見えることもあるんだ、という考えを持つことができた。また、その後の社会科の授業においても、「難民問題」や「スラム」「発展途上国の環境問題」などに関して差別的な発言が激減したことは、大きな成果だと言える。また、一部の生徒が YouTube や SNS などでも今回の授業で取り上げた内容について調べ（良くも悪くも）様々な情報を得たことで、自分たちで考えるきっかけになった。現代の生徒たちはすぐに情報に触れることが出来ることから、メディアリテラシーの在り方についても学ぶ良い機会になればと思う。

4. 備考（授業者による自由記述）	私は教科の中で世界の国について触れることがあるため、実践後の授業でもその反応を見ること、追って話をすることがあるが、やはり「途上国」「異文化」について継続して意識させることは難しいと感じる。在日韓国・朝鮮人の多い地域にある学校なので、多文化を意識することは、地元への理解を深めることにもなるし、特に多文化ルーツのある生徒にとっては、アイデンティティの形成などにもつながってくる大事な取り組みである。 今回の授業とは関係ないのだが、別の道徳の授業で「地域理解・地元への愛情を持つ」という単元で、玉造は昔「唐居町」（からいちょう）という場所があり、唐、つまりは渡来人などの船着き場であって、大昔から朝鮮半島や中国の人がここに住んでいたんだという話をしたときに、在日韓国人の男の子が目を輝かせて、そんな昔から友好的だった場所なんだととても嬉しそうであった。 それくらい生徒たちにとって多文化共生は切っても切り離せない身近なものであり、こういった取り組みを継続して行うことで、この地域で生まれ育ったことへの誇りへとつなげていきたい。 また、せっかく今回の JICA 関西の研修で、技能実習生の現状や、授業実践の方法などをいろいろと学ぶことが出来たのに、それを活かしきれなかった思いが強い。もっと自分の料簡を広げ、生徒へフィードバックを図れる技量を身に着けたい。
-------------------	--

添付資料：

- 1：ハーバービジネスオンライン すしざんまい社長が語る「ソマリア海賊問題」の文章
（ハーバービジネスオンライン すしざんまい社長が語る「築地市場移転問題」と「ソマリア海賊問題」<https://hbol.jp/77365/>から一部抜粋のもと独自に作ったもの）
- 2：生徒に配布したワークシート

参考資料：

- ・ハーバービジネスオンライン すしざんまい社長が語る「築地市場移転問題」と「ソマリア海賊問題」
<https://hbol.jp/77365/>
- ・ハーバービジネスオンライン すしざんまいが救いきれなかったソマリア海賊の微妙な転職先
<https://hbol.jp/82261/>
- ・yahoo japan ニュース すしざんまい社長はソマリア沖の海賊を壊滅させたのか？
<https://news.yahoo.co.jp/byline/dragoner/20160121-00053658>
- ・すしざんまい社長が、あの「海賊壊滅作戦」の真相を語った！
<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/48307>
- ・Wikipedia ソマリア沖の海賊
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BD%E3%83%9E%E3%83%AA%E3%82%A2%E6%B2%96%E3%81%AE%E6%B5%B7%E8%B3%8A>
- ・外務省 ソマリア沖・アデン湾における海賊問題の現状と取組
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/pirate/africa.html>
- ・（公財）滋賀県国際協会 Glocal net Shiga 言葉がわからない体験ゲーム「何が起こった？（震災編）」

写真 1



写真 2



写真 3



すしざんまい社長が語る「ソマリア海賊問題」

2001年に第1号店を東京・築地^{つきじ}場外市場に「すしざんまい 本店」をオープン。現在では北海道から九州まで、51店舗を展開。その多くが年中無休24時間営業で、本格的な寿司を手ごろな価格で楽しむことができるという、それまでの寿司屋の常識^{くつがえ}を覆^{くつがえ}したのが、株式会社喜代村の木村清社長だ。

「すしざんまい」が年間300件の海賊被害をゼロに

記者：「すしざんまい」の社長が、アフリカのソマリアで、元海賊とマグロ漁をやっている……と話題になったことがありましたね。

木村：今でもやってますよ。ソマリアの沖というのは、キハダマグロのいい漁場なんです。ところが海賊が出るようになり、危なくてマグロを獲りに行けなくなってしまったんです。しかし、聞いてみると誰も海賊とは話していないという。おかしいじゃないですか。海賊といったって相手は人間なんですから。それでさっそく、伝手^{つて}を頼ってソマリアの海賊たちに会いに行きました。そこでわかったことは、彼らだってなにも好き^す好^{この}んで海賊をやっているわけじゃないということです。だったらこの海で、マグロを獲ればいいじゃないか。自分で稼いだ金で家族を養うという、誇りを持った人生にしくちゃいかん——と彼らと話し合ったんです。

記者：ソマリアの人たちは、内戦で国を失い、無法地帯^{むほうちたい}となった彼らの海が荒らされたため、海賊になったと主張しているそうですが、自力では対抗できなかったのでしょうか…？

木村：口で言うのは簡単ですが…、まず彼らは、マグロ漁の技術をもっていないし、船もありません。マグロを獲ってもそれを入れておく冷蔵倉庫が使えなくなっている。獲ったマグロは売らなければなりません、そのルートももっていない。

IOTC（インド洋まぐろ類委員会）に加盟していないから、輸出ができなかったんです。じゃあ、仕方がない。うちの船を4隻^{せき}もっていった。漁の技術も教えましょう。冷凍倉庫も使えるようにする。ソマリア政府にはたらきかけて、IOTCにも加盟する。獲ったマグロをうちが買えば、販売ルートも確保できる。こうやって一緒になってマグロ漁で生活ができるようにしていったんです。

記者：「民間外交」の枠を超えた貢献^{こうけん}ですね。なぜそこまで？

木村：いろんな国や国際機関も援助をやってますが、どれも上滑り^{うわすべ}のことばかりであり役に立っていないことも少なくありません。相手の視線に立って、相手の悩みに気がついてあげることが必要なんです。ソマリア沖じゃ一時は年間300件、海賊による被害があったそうですが、うちが行くようになって、この3年間の海賊の被害はゼロだと聞いています。よくやってくれた、ジブチ政府から勲章^{くんしょう}までいただきました。

記者：そこまでして、事業として採算はとれるんですか。

木村：んー。まあ、正直言って今のところまだ採算はとれていませんね。しかし、将来的にはきちんと利益が出る目論見^{もくろんみ}はたっていますよ。それに商売というのは、目の前の利益、儲け^{もうけ}のことを第一に考えていたんではうまくいかないものなんです。まず考えなくてはならないのは、

どうやったら喜んでもらえるか、何を求められているかということ。それに応える算段をするのが「商売」ではないですか。

海賊王になった男

- ① 海賊を撲滅するためにはどうしたらいいと思いますか？

- ② 海賊たちに対して社長がおこなったこととは？

- ③ ソマリア海賊たちに訴えた「誇りを持った人生」とはどのようなものでしょうか。

- ④ 社長が商売において大事にしていることは何でしょうか。

- ⑤ 社長が④のようなことが大事だと言ったのは、どういう思いがあるからでしょうか。

- ⑥ この時間中に思ったことをまとめましょう。

1 年 組 番 名前
